

第 53 回 日本顎口腔機能学会学術大会報告

日本大学松戸歯学部 顎口腔機能治療学講座

大会長 川良美佐雄

準備委員長 小見山 道

第 53 回日本顎口腔機能学会学術大会は、日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学講座の主管で、川良美佐雄教授を大会長として、平成 26 年 10 月 4 日および 5 日の 2 日間、日本大学松戸歯学部 101 教室で開催された。

大会は 4 日（土）に大会長の挨拶で始まり、まずは新潟大学の井上誠先生の座長で、日本大学松戸歯学部の薦田祥博先生が「継続した舌拳上運動が皮質運動野へ及ぼす影響」、大阪大学の徳田佳嗣先生が「ゼリーの物性がスクイーミング時の舌圧に及ぼす影響」についてそれぞれ発表した。



続いて新潟大学の小野高裕先生を座長として、広島大学の森隆浩先生が「認知症高齢者における舐摂（しせつ）機能と VF 時の嚥下動態との関係」、岩手大学の佐々木誠先生が「舌骨上筋群の表面筋電位を用いた舌運動の識別とその可視化法」、新潟大学の小飯塚仁美先生が「寒天咀嚼・嚥下時における気圧計による口腔内圧の測定」について発表があった。この日の午前の部は、摂食・嚥下障害に関連する舌の機能に関する演題であり、新たな知見に対するディスカッションが活発に行われた。その後、鹿児島大学の兼松恭子先生による 54 回学術大会企画についてのアナウンスがあり、午前の部を終了した。



午後の部は、東北大学の服部佳功先生を座長として、明海大学の遠藤 舞先生が、「垂直顎間距離決定の基準下顎位に関する研究—咬合支持喪失状態が[n]持続発音位に及ぼす影響—」、鹿児島大学の北嶋文哲先生が「成人正常咬合者における下顎第一大臼歯の咀嚼運動経路の経時的変化」について、また明海大学の藤澤政紀先生を座長として、日本歯科大学の小見野真梨恵先生が「食品の硬さの違いによる咀嚼運動の変化」について、徳島大学の鈴木善貴先生が「切歯路角と睡眠時ブラキシズムパターンの関係」について発表された。さらに北海道大学の山口泰彦先生を座長として、大阪大学の宇野浩一郎先生が、「睡眠・覚醒状態および身体活動状態が慢性疼痛に及ぼす影響について」、昭和大学の片山慶祐先生が「マウスにおける咬筋の筋活動に対する明暗および睡眠-覚醒サイクルの影響」について発表された。このブロックは発音、咀嚼、ブラキシズム、睡眠関連の演題とバラエティに富んだ内容であったが、座長の先生の巧みな誘導で、多くの質問とディスカッションが行われた。



特別講演は、日本大学医学部精神医学系精神医学分野の内山真教授により、「睡眠中の運動コントロールとその仕組み」の演題で、川良大会長を座長として行われた。内山教授は、ナルコレプシーにおける情動脱力発作と睡眠麻痺のメカニズム、レム睡眠行動障害におけ

る行動異常、睡眠関連呼吸障害と舌筋や上気道筋の緊張制御、周期性四肢運動障害や睡眠関連歯ぎしりなどの睡眠関連運動障害について、貴重な動画を含めて講演され、参加者は熱心に聞き入り、内山先生は講演後や懇親会時にひっきりなしの質問に答えられていた。



懇親会は学生食堂にて和やかな雰囲気で行われ、ここでも演題や特別講演に対する質問や熱心なディスカッションが会場中で見られ、この学会ならではの貴重な情報交換が行われた。



2日目は、広島大学の吉川峰加先生の座長で口演が始まった。新潟大学の林宏和先生は「咽頭電気刺激による嚥下機能への驚くべき効果」について、また同じく新潟大学の神田知佳先生が「炭酸水による咽頭刺激は嚥下機能にどのような変化をもたらすか」について発表し、高齢化社会を見据えた嚥下関連のディスカッションが行われた。最後のセッションは、大阪大学の石垣尚一先生を座長として、奥羽大の宗形芳英先生が「視覚情報の変化がチューインガム咀嚼時の下顎運動におよぼす影響」について、日本歯科大学の岡田大和先生が「苦味の程度が異なるグミゼリー咀嚼時の咀嚼運動」について、東北大学の高橋実先生が「咬合支持状態の異なるクレンチングにおける全咀嚼筋の活動様相 新たな咬合力計を応用した mfMRI による解析」について発表し、最後まで活発なディスカッションが続いた。



前回から始まった演者の相互評価による大会優秀賞は、岩手大学の佐々木誠先生が栄える優秀賞 1 位となり、徳島大学の鈴木善貴先生と大阪大学の徳田佳嗣先生とが優秀賞に輝いた。

今大会は、2 日間で 100 名を超える方々にご参加いただき、16 の演題に対して非常に活発な議論が展開された。初参加の方も多く、また若い研究者も目立ち、皆木会長をはじめ学会の方針である若手研究者の育成にふさわしい有意義な学会となった。